

ドンマイ!!

茜川オダマキーズ

(第五話)

主な登場人物

織田真紀―オダマキーズ捕手・キャプテン
海藤知慧―前同二塁手・副キャプテン
早田里菜―前同・一塁手
桐林沙月―前同・三塁手
龍野季穂―前同・遊撃手
城内美青―前同・監督
麓飛鳥―前同・中堅手
本村香苗―前同・左翼手
水上小夜―前同・右翼手
杉崎寿音―前同・投手
皆川悠希―前同・投手
城内真理子―美青の母親
杉崎芳江―寿音の祖母
園内裕美―スーパーマーケット・パート従業員
若本珠代―茜川高校・現代文教師
早田真耶―里菜の姉
大阪―カメラマン
麓栄治―飛鳥の父
恵―飛鳥の母
岡坂恵里―朝霞学園女子野球部・投手
海藤賢倫―知慧の兄
凌雲―知慧の叔父
桐林優花―沙月の妹
龍野研造―季穂の父
静海―季穂の母
真斗―季穂の弟

片平―モデル事務所マネージャー
権藤凜子―朝霞学園女子野球部監督

(第五話)

○総合病院・入口

タクシーが止まる。後部座席のドアが開き、真紀が飛び出してくる。走って院内へ入る真紀。

○前同・ロビー

知恵たち九人がやってくる。立ち止まる真紀。対峙する真紀と九人。

真紀「美青、美青は……」

飛鳥「あなたに美青を心配する資格はない」

沙月「最近のお葬式はそういうリゾート感覚満載のお洋服で出るのが流行りなの、真紀？」

季穂「真紀の住んでる国じゃそうなんだよ」

香苗「ひどい……ひどいよ真紀ちゃん。なんで電話出なかったの？」

知恵ちゃんずっと電話かけてたんだよ。メールも送ってたんだよ」

知恵「あんまりつながらないからさ、もしかして思ってた家にかけたの。そしたらおばさんが出てさ『今日休みだから真紀、和樹くんと海に行ったわよ』とか言うじゃん。もうびっくり」

真紀「……ごめんなさい」

知恵「でさ、埼玉のおおおばさんっての、実在するの？」

首を横に振る真紀。

真紀「一昨年、亡くなった」

知恵「二回死なせちゃったんだ。すごいねあなた」

真紀「……」

知恵「和樹くんと海でスイートな時間を過ごしてたわけだね、携帯の電源切って。美青が意識失って苦しんでるときに」

泣き出す真紀。

知恵「泣きやいいってもんじゃないわよ！ なんなのよあなた！」
そのとき、真紀の携帯が鳴る。『CHERRY』が鳴る。

真紀「出れば」

泣き続けている真紀。やがて切れる着信音。

真紀「帰ろ、みんな」

病院を出ていく九人。

立ち尽くし泣き続ける真紀。

○前同・廊下（403号室）

部屋の前に立っている真紀。ノックをする。中から「どうぞ」の声。中に入る真紀。

○前同・403号室内

二人部屋。部屋に真理子と珠代がいる。真紀に気づく美青。

美青「お母さん、先生。真紀と二人で話しがしたい」

真理子「分かった。具合悪くなったりしたらナースコールするのよ」

美青「うん」

珠代、去り際に。

珠代「織田さん、みんなに嘘をついていたのはよくなかったわ。あ

とでちゃんと謝ろうね」

真紀「——はい」

二人になる真紀と美青。

美青「ねえ、真紀。こっち来て」

真紀「——うん」

動かない真紀。

美青「来てってば」

美青の枕元まで行く真紀。

美青「椅子あるから座って」

椅子に坐る真紀。うなだれる。

真紀「美青、ごめん……」

美青「みんなから聞いた。海、楽しかった？」

真紀「……ごめん」

涙をこぼす美青。

美青「こっちこそごめんだよ。楽しかった日、最後にだいなしにしちゃった。ごめんね」

首を横に振る真紀。

美青「ここんとこ毎晩みんなに渡すプリント遅くまで作っててさ、ちよつと無理しすぎちゃったみたい。真紀のもあるから明日渡すね」

何度も頷く真紀。

美青「みんなと会った？」

頷く真紀。

真紀「怒られた？」

頷く真紀。

美青「ちゃんと言えばよかったんだよ、和樹くんと海に行くんだって。誰も止めないよ、そんなの。バカだなあ真紀は」

何度も頷く真紀。

真紀「バカだ。ほんとにバカだわたし。最低だ……」

美青「最低だとは言ってない」

真紀の額に軽くデコピンをする美青。

真紀「いつっ……」

美青「はい、これでおしまい。あはははっ」

真紀「美青……」

美青「もっとみんなのこと頼っていいよ真紀は。みんな真紀のこと大好きなんだから」

首を横に振る真紀。

美青「知慧にいつぱい怒られた？」

頷く真紀。

美青「しかたないあなあ知慧も。知慧は嫉妬しちやってるんだよね、和樹くんに。真紀取られちゃってさ」

真紀「え」

微笑む美青。

美青「知慧にもみんなにも、いつまでも怒ってないようわたしからメールしておく。チームの和を保つのも監督の務めです」

真紀「……ごめん、ごめんね美青」

美青「真紀。わたしだってさ、好きな人と海に行く約束してたら、全部ほっぽりだしちゃうよ、絶対——ねえ、聞かせて真紀、今日のこと。わたし聞きたい」

真紀「美青……」

真紀の手を握る美青。

美青「いっぱい聞かせてよ」

美青の手を握り返す真紀。

真紀「うん、あのね——」

話し始める真紀。

○茜川高校・小運動場（日替わり）

炎天下、一人でグラウンドのトンボがけをしている真紀。

知慧がやってくる。無言で真紀を見る。里菜が来る。季穂と

沙月が来る。寿音、悠希、飛鳥、小夜も来る。涙を拭いなが

らトンボがけをする真紀を見続ける八人。

知慧「おーい、路チュー女。そのへんにしてこっちこーい」

動きの止まる真紀。

知慧「こっち来いっつてんの、路チュー女」

トンボを手にして八人の前に立つ真紀。知慧、七人を見渡して。

知慧「座ろうか」

その場に座る八人。

真紀「あの……」

知慧「なにやってんの。あんたも座りなよ路チュー女」

座る真紀。

香苗「へガリガリ君」買ってきたよー」

香苗がビニール袋を提げてやってくる。全員にへガリガリ君

を渡す香苗。

香苗「はい。真紀のおごりだから、後でお金ちょうだいね」

真紀にも差し出す香苗。

真紀「あの、わたし……」

知慧「全部話しな。そしたらへガリガリ君のおごりとセットで許してやる」

真紀「全部」

知慧「ああ、詳しく全部。前の晩わたしに、嘘電話かけたところから、玄関先の路チューまで海の一日全部詳しく話せ」

里菜「それで終わり。監督命令よ、真紀」

九人を見渡す真紀。誰もがニヤニヤと笑っている。

涙を浮かべ情けない笑みを浮かべる真紀。

○杉崎家・居間（日替わり）

向かい合って座っている寿音と芳江。

テーブルの上に封の開けられた封筒が置かれている。重い沈

黙。

芳江「——いらんことを知らせてきて、あの女。名前も書かずおま

え宛てだというのが余計に腹立たしい」

寿音「会いに行ってもいいでしょ」

芳江「許さない」

寿音「おばあちゃん……」

芳江「俊人に会いに行くのは許さない。あの子がいつ死のうが知ったこっちゃない」

寿音「……わたしの、お父さんだよ」

芳江「ああ。季利子さんとあんたを捨てて、女のところに行ったあんたのお父さんだ。わたしの息子だ」

寿音「——お母さん、おかしくなってたじゃん。覚えてるよわたし。

妄想酷くなって、いつもお父さん問い詰めて。寝てるときも枕元に座ってぶつぶつ言って。他の女の人に頼っても仕方ないよ」

芳江「それでも添い遂げるのが夫の務めだ」
寿音「古いよそんな考え」

芳江「知った風な口をきくんじゃない！」
寿音「……おばあちゃん」

芳江「季利子さんが首を吊ったのは、あの子が出ていったからだ。
他に女を作ったからだ。わたしはあの子を許さない——許したり
したら、季利子さんに申し訳がたたない」

寿音「おばあちゃん……」

芳江「惚れた女にだけ看取られて死ねばいい」
うつむく寿音。

○河川敷のグラウンド（日替わり）

〈TⅡ××カップ・決勝トーナメント一回戦対パンサーズ〉
マウンド上の寿音と真紀。

真紀「さあ、いよいよ決勝トーナメントだ。五回まで全力で行こう
よ。あとは悠希が締めてくれる」

寿音「——うん」

真紀「どしたの？　なんか元気ないよ」

寿音「え——大丈夫」

真紀「そう。じゃ、しまっていこう」
守備位置につく真紀。マウンドをならす寿音。

× × ×

先頭打者にフォアボールを出す寿音。

続く打者にヒットを打たれる。三番バッターにもフォアボ
ール。あつという間に無死満塁になる。

マウンドに行く真紀。

寿音、うつむいたまま顔を上げない。涙をこぼす。

真紀「寿音」

寿音「——お父さんが死んじゃうの」

真紀「え」

寿音「でも、会いにいけないの。おばあちゃんが会いに行っちゃいけないっていうの」

涙をこぼし続ける寿音。

真紀「——分かった。美青！ピッチャー悠希に交替して！寿音ちよつと投げられない！」

美青「え——」

隣に立つ裕美を見る美青。

裕美「キャッチャーがああ言ってるわ。どうする？」

頷く美青。

美青「悠希、行ける？」

頷く悠希。

美青「完投しなきゃいけないんだよ」

悠希「分かってる。任せて」

マウンドに向かう悠希。

裕美「この試合の指揮はわたしがとるわ。あなたは杉崎さんのところにずっといてあげなさい」

美青「はい。分かりました」

×

×

×

マウンドの悠希、バックの七人を見て。

悠希「打たせていくよ！」

変化球を駆使した巧みな投球で相手打線を打ち取っていく悠希。安定した守備で悠希を盛り立てる内、外野陣。

連打で得点を重ねるオダマキーズ打線。

ベンチの椅子、寿音の横に座りその手を握り続けている美青。

×

×

×

最後の打者をサードゴロに打ち取る悠希。ゲームセット。スコアボードは【8対2】。整列を終えベンチに帰ってくる九人。寿音と美青の前に立つ真紀。

美青「話し、聞いた。真紀の出番だよ」

真紀「え？」

美青「ピッチャーのピンチはキャッチャーが助けるの」

涙の浮かぶ目で真紀を見つめる寿音。

○寿音の家・居間（日替わり）

テーブルを挟み向かい合って座っている芳江と寿音、真希。

芳江「織田さんの寿音を思ってくださる気持ちはよく分かりました。

いいお友達を持ったね寿音。おばあちゃん嬉しいよ」

真希「じゃあ」

首を横に振る芳江。

芳江「これは、わたしと寿音の問題。家族の問題なの。他人様に助

言をいただくものではないのよ。分かるわね」

言葉に詰まる真希。重い沈黙。

芳江「寿音のためにありがとう。お話できて嬉しかったわ。残念だ

けど、わたしの考えが変わることはないわ。今日はこれでお引き

取りいただけるかしら」

真希「……あの」

寿音「まだ何か？」

真希「……あの、わたしにもお父さんがいます。サラリーマンやっ

てるんだけど、なんていうかダサいっていうか、ウザいっていう

か」

真紀「——」

真希「小五のときだったかな。お父さん会社リストラされちゃって。

無職だったときが一年くらいありました。お母さん、パートの仕

事かけもちするようになって。お母さんの給料と、お父さんのち

よつとだけの退職金でなんとか生活してて。でも、お父さん妙に

明るいですよね。『今日も面接ダメだったあ』なんて笑って言っ

てるんですよ。わたし、正直お父さん軽蔑してました。ダメ社員

だからリストラされたんだって。お母さん、離婚すればいいのに。

そしたらわたし、お母さんについていくのになって、思っていました

——でも、お父さん無理に明るくふるまってたんですよ、今だ

から分かるけど。焦ってなかったわけないだもん。ね、そうですよね」

芳江「ええ、きつとそうよ」

真希「ですよね。最近思うんですよ、お母さんもしかしたらお父さんのそういうところ好きになったのかなあって——あ、でもやっぱりウザいんですよお父さん。この前なんか紙切れてるのに気づかないままトイレで大きい方して。ドアどんどん叩いて『真希、紙がない!』って。しばらくほっといたんですけど、ドア叩き続けて。んで、仕方ないからトイレトーパー持ってって、ちょっとだけドア開けた瞬間すごい音立てて……」

ブツと笑う芳江。

真希「ごめんなさい汚い話で。あれ絶対わざとやったんですよ。ほんともう信じられない。前なんか脱衣所で服脱いでるとき、入ってこようとしましたんですよ『なんだ真希いたのか、ごめんごめん』って。あれも絶対わざとです。二週間口きいてあげませんでした。」

あとね『おまえの乳首最初に嘗めた男は俺だ。保育園のとき、俺に乳首舐められるとおまえすごい喜んで』とか言うんですよ!ほんとマジ最低!」

芳江「——いいお父さんね」

真希「どこがですかっ! でも——そういうのも思い出になるんですよねきつと、お父さんが死んだら」

芳江「……」

真希「お父さんが死ぬなんてこと、考えたこともなかった。わたし、寿音から話聞いて、それ考えたとき、すごく怖くなった。でも、遠い先かもしれないけど、そのときは絶対来る——信じられない、家族の誰かが死ぬなんて。おばあさん、寿音、今すごく怖いと思います。毎日怖いんだと思います。長い間会ってないお父さんだけど、ううん、長い間会ってないから、余計に怖いはずですよ。お母さんも死んじゃってないのに……わたしだったら耐えられない。ずっと会えなかったのに、今からもう会えなくなるのに、な

んで会いにいつちやいけないんですか？　お願いです。寿音の気持ちをご大事にしてあげてください。お父さんに会わせてあげてください」

寿音「……」

真希「おばあさんはさっき、家族の問題だって言われました。確かにそうです。でもこれは、わたしたちバッテリーとおばあさんの問題でもあるんです。ピッチャーのピンチはキャッチャーが助けるんです。美青にそう言われました。わたし帰りません。寿音をお父さんに会わせてくれるっていう言葉、おばあさんから聞くまで、ここから動きません」

芳江をまっすぐ見つめる真希。芳江も視線を外さない。芳江ふいにふっと笑って寿音を見て。

芳江「本当にいい友達に出会ったね。茜川に行ってよかったね、寿音」

天音「おばあちゃん……」

微笑んでいる芳江。

○茜川高校・小運動場（日替わり）

練習をしているメンバーたち。寿音が入ってくる。誰もが彼

女の元へ集まる

美青「落ちついた？　寿音」

寿音「うん。みんな——その節はありがとうございました」

頭を下げる寿音。

寿音「里菜。父の湯灌をしてくれて、本当にありがとう」

里菜「こちらこそありがとう。初めてで、いたらないことばかりで」

寿音「お父さん喜んで。知恵、お経読んでくれてありがとう」

知恵「本当にわたしでよかったの？」

寿音「どうしても知恵に読んでほしかった」

知恵「——途中で泣きそうになって困ったわ」

寿音「すごいかったよ。知恵のお坊さん姿」

飛鳥「あ、それわたしも思った。妖怪とか退治しに出かけるみたいだったよね」

知慧「どういう感想よっ」

笑いがおきる。

寿音「みんな、わたしもう大丈夫だから。そりゃ——泣くことあるかもだけど、でも、大丈夫だから。真希」

真希を見る寿音。真希、涙ぐんでいる。

寿音「ありがとう。真希のおかげで、最後にお父さんと毎日会えた。いっぱい話しもできた。お父さんも高校時代ピッチャーだったんだ。真希のこと、最高の女房役だっって言ってたよ」

真希、泣き始める。

知慧「とにかく泣く、この女は」

真希「うるさいよ……」

知慧「でもまあ、今回はよく頑張ったわ、あんた」

真紀「え——」

誰もが真紀を見て笑っている。

真紀「——初めて知慧に褒められたかも」

知慧「最初で最後だと思うけどね」

小夜が泣いている。

飛鳥「小夜」

首を横に振る小夜。

寿音「言っつて、小夜」

また首を横に振る小夜。

寿音「ねえ、言っつて」

小夜「——お父さんに会いたい。電話ばっかですばらしく会えてないの。だから、会いたい——変なこと言っつてごめん」

涙をこぼし続ける小夜。

寿音「なんにも。会っつてきなよ小夜」

小夜「え」

寿音「会いたいときに会わなきゃ」

小夜「でも、でも」

寿音「子供が親に会うのに、気なんか遣っちゃだめだよ。ねえ」
うなずく誰も。

小夜「ありがとう。今から福岡行ってくる」

沙月「飛行機代、ある？ なかったらみんなで出すよ」

小夜「大丈夫。ごめんね、三日くらい練習休む」

知慧「遠慮することないよ。ちゃんと理由言ってお休み。誰かさ
んとは大違いだ」

真紀「もう、だからごめんってば」

知慧「悪いけどババアになっても言わせてもらおう」

笑いがおきる。

○河川敷のグラウンド（日替わり）

〈TⅡ決勝トーナメント準決勝 対ガーディアンズ戦〉

六回を終わって5対2でオダマキーズがリードのスコアボ
ード。

マウンド上の寿音。最後のバッターを三振に打ち取る。

寿音「っしゅっ！」

ガッツポーズの寿音にかけよる真紀。真紀の額に軽くデコピ
ンをする寿音。

真紀「ちよっ、なによっ！」

寿音「勝利の儀式。これで終わりのな？ 美青にもされたんですよ。
ははっ」

朗らかに笑う寿音。

真紀「もう——勝ったかな、朝霞」

寿音「みたいよ、ほら」

寿音の視線の先に、歩いてやってくる凜子。

ベンチの前まで来る凜子。その前に立つ美青。対峙する二人。

凜子「勝ったようね」

美青「そちらも」

凜子「当たり前でしょ。今年の全国大会優勝のうちがオジサンチームに負けるわけじゃない。これに参加した目的はあくまでチームの底上げよ。補欠を出すには格好の舞台だったわ。ちなみに投げたのはキャッチャーの澄香だけどね」

真紀「キャッチャー……」

凜子「そうよ。オジサンチーム相手にエース投げさせることもないしね」

美青「決勝も?」

凜子「え?」

美青「うちとの決勝も補欠主体のメンバーですか」

凜子「そうねえ——ちよつとは骨のあるチームになったみたいだし、

敬意を表してレギュラーメンバーで臨ませていただきますか」

美青「そうですか。じゃあ一つ提案があります」

凜子「なによ」

美青「九回制でやりませんか」

凜子「九回制?」

美青「はい。九回で決着をつけてこそその野球だと思えます。だから決勝に関しては、特別に九回。うちとそちらが了承すればなにも問題はなと思いますけど」

黙り込む凜子。

美青「いやなんだ。自信ないとか? それって超ウケるんですけど」

凜子「なっ——だれがイヤっていったのよ。分かったわ。決勝戦は

九回制でやるわよ」

美青「はい。ありがとうございます。それと」

凜子「まだなにかあるの」

美青「わたしたちが勝ったら、園内コーチを侮辱したこと、コーチに頭を下げて謝ってください」

凜子「侮辱? わたしがあの女のなにを侮辱したっていうの?」

離れたところに立っている裕美を見る凜子。

凜子「汚らわしい淫行元教師のなにを侮辱したのかしら」

美青「——それが侮辱です」

にらみ合う二人。

凜子「まあいいわ。それであなたが納得するのなら。まあ、うちが負けるわけなんてないけれども。じゃあ、こちらからも一つ。うちが勝ったらあの女を指導者から外しなさい」

美青「そんな——」

裕美「あら、自信ないのかしら。超ウケるんですけど——許せないのよ、あの汚らわしい女が女子野球の指導をしてるってのが」

美青「——分かりました。うちが負けたら園内コーチは指導者から外れてもらいます」

裕美「よし。じゃあ成立ね。一週間後楽しみにしてるわ」

去っていく裕美。

様子を見ていた真紀たちが美青に近寄る。

美青「みんな、ごめん。コーチのこと、勝手に」

誰もが裕美を見る。

裕美「クビがかかってしもうたかあ。まあ、ここらへんが潮時かもなあ」

真紀「そんな」

裕美「勝つんやろ?」

真紀「え?」

裕美「勝つんやろ、あんたら」

頷く誰も。

裕美「九回制か。うちのチームにはええ戦略やと思うで」

美青「はい。こっちの土俵に引きずり込めました」

裕美「やっぱりチームのことよう分かってるええ監督やわ、あんた。

けど、アレやな」

美青「はい?」

裕美「あんたとあの女のやりあいを見ててオモロイなあ。お金とれるわ」

珠代「確かに。たいしたものよ、城内さん」

美青「——なんか、あんまり嬉しくくないです」
笑いが起きる。

○【悠連会館】蓮の間

畳敷きの広間で通夜ぶるまいの席が開かれている。
祭壇には老婆の遺影。通夜にしては賑やかな雰囲気の中、寿
司の桶や、瓶ビールを配膳している里菜と真耶。

○前同・廊下

肩を並べて歩く里菜と真耶。

里菜「九十八才、昨日まで元気で寝ている間にじゃあ、お通夜も分
お祭りだね」

真耶「ピンピンコロリってやつだよ」

里菜「うん——お姉ちゃん、高校どうするの」

真耶「通信制受けること、考えてる」

里菜「そっか。うん。それがいいよ。ねえ、お姉ちゃん」

真耶「なに」

里菜「朝霞との決勝、観にきてくれるんだよね」

真耶「うん、もちろんだよ」

里菜「絶対勝つからさ」

真耶「うん——里菜」

里菜「なに」

真耶「ありがとう」

肩を並べて長い廊下を歩く二人。

○本村家・仏間

祖母の仏壇の前に座っている香苗。

矢井田瞳「My Sweet Darlin」のサビを口ずさむ。

香苗「ヤイコの『My Sweet Darlin』。この前カラオケ行ったとき、
飛鳥ちゃんに教えてもらってたんだ。季穂ちゃんからは相川七瀬、

いっぱい教えてもらった。智慧ちゃんはね、みんなの知らない昔のアイドルの歌たくさん知ってる——ねえ、おばあちゃんが、みんなと会わせてくれたの?」

祖母の位牌をじっと見つめ続ける香苗。

香苗「朝霞に絶対勝つよ。見ててね、おばあちゃん」

○撮影スタジオ

ファッション雑誌の撮影に臨んでいる小夜。彼女を撮っているカメラマンの大坂(44)。片平がその様子を見守っている。

○前同・廊下

片平といっしょに帰っていく小夜。

大坂「水上さん」

小夜「振り返って。」

小夜「はい」

大坂「きみ、野球やってるんだって?」

小夜「はい」

大坂「ソフトじゃなくって」

小夜「はい」

大坂「どこ守ってるの」

小夜「ライトです」

大坂「意外だなあ。ボクもね、中学校のときは野球部だったんだよ。

サード守ってた」

小夜「そうなんですか」

大坂「うん——きみ、似合うだろうなあ、ユニフォーム姿」

小夜「じゃあ、撮ってもらえます?」

大坂「え?」

小夜「次の次の日曜日、大事な試合があるんです。全国大会優勝した女子のチームとやるんです」

大坂「へえ、そりゃすごい」

小夜「わたしだけじゃなくて、チームのみんなも撮ってもらえませんか。お金、お支払いしなきゃだめですか？」

大坂「いや、ボクはほら、日曜日は朝から夜まで趣味で写真撮るところにしてるから」

小夜「じゃあ」

大坂「いいよ」

小夜「ありがとうございます！」

深く頭を下げる小夜を笑って見ている大坂。

○【麓喜軒】店内

客で賑わっている店内。配膳をしている恵。厨房で調理をしている栄治と信和。その隣で洗い物をしている飛鳥。

× × ×

閉店後の店内。洗い物を終えた飛鳥が厨房を出て行くところ。

栄治「おい」

飛鳥「なに」

栄治「飯食ってから戻れ」

飛鳥「は？ お母さんの作ったの食べるけど」

恵「今日は作ってないの」

飛鳥「どうということよ」

恵「いいから座んなさいよ」

怪訝な顔で四人掛けテーブルの椅子に坐る飛鳥。

× × ×

飛鳥の前にラーメン、チャーハン、唐揚げを飛鳥の前に置く恵。

恵「がんばれってことじゃない」

栄治を見る飛鳥。黙々と仕込みをしている。

飛鳥「——こんな時間に背油ガッツリのラーメンとかさあ」

食べ始める飛鳥。

○【アドラブル】店内

カウンター席に座った沙月と季穂が、ヒソヒソと話をしている。

沙月「あれさ、やっぱりそうだよね」

季穂「うん、間違いない」

二人、小さな素振りですぐ二人掛けのテーブル席に座った男女を

見る。女は朝霞学園のピッチャー恵理。

沙月「朝霞からじゃ遠くない？」

季穂「だからさ、遠征だよ、遠征デート」

沙月「遠征デート？」

季穂「地元じゃ見つかる可能性高いからだよ」

沙月「あ、そっか。恋愛禁止だ」

季穂「だよ。それで悠希やめたんじゃない」

沙月「作戦としては、ここで席を立ててあの子のところに行くのも

ありかな」

季穂「え？」

沙月「で、『いいの、彼氏なんか作っちゃって。あの女監督にばらし

ちゃおっかなー』なんて言ったりしたらどうなるだろ、あの子」

季穂「沙月、あんた——」

沙月「うっそ。そんなことするほど性格悪くないよ」

季穂「もう——でもマジでバレたらいへんだよあの子」

沙月「とことんバカだよ、あの監督——出よっか。カラオケでも

行こうよ。香苗とかに電話して」

季穂「なによ急に」

沙月「向こうがこっちに気づくかもしれないでしょうが」

季穂「——うん、だね」

沙月「優しいねえ、うちらってば」

立ち上がる二人。

○知慧の家・リビング（夜）

風呂上りの知慧が入ってくる。賢倫がバラエティー番組を観ながらカップ麺とスナック菓子を食べて缶チューハイを飲んでいる。爆笑する賢倫をじっと見る知慧。

知慧「メジャーデビューは？」

賢倫「え、何？」

知慧「バンドでメジャーデビュー目指すって話？」

賢倫「はあ、もしかしてマジにとつてたの？ んなの無理に決まってるじゃない。意外と頭悪いなあおまえ」

知慧「じゃあ就職活動は？」

賢倫「なものするわけないだろ、俺この寺継ぐんだから。学校で僧籍もらえたしな。まあ落ち着くところに落ち着いたっていうかね」

知慧、賢照に近寄りカップ麺と缶チューハイを奪い取りキツ

チンの流しに捨てる。

賢倫「何すんだよ！」

知慧、賢照の襟首掴み、壁に押し付ける。

知慧「ねえ、わたし時々凌雲おじさんのお寺に行ってたの」

賢倫「凌雲おじさんの……何しにあんなところ行ってたんだよ」

知慧「何しにっっておじさんと話して。居心地いいんだ、あそこ。も

ちろんお兄ちゃんのこと話すこともあったよ、お兄ちゃんが普

段どんな生活送ってるか、とか」

賢倫「どんな生活って、おまえ……」

知慧「バンド仲間と女の子のお尻ばっか追っかけて朝帰りばっかしてて、親の金で買ってもらった車乗り回して喜んで、学校は授業ほとんど出ないからいつも単位ギリギリとか、そういうこと。おじさんさあ、お兄ちゃんの話しになると一気に機嫌悪くなるんだよね。おじさんこの前言ったんだわ『今までは猶予期間だ。卒業したらうちに修行に來させる。時間かけて性根叩き直してやる。そのまま寺は継がせない。名付け親としての責任だ』だってさ」

眼を見開き口をパクパクさせ言葉を出せない賢倫。

賢倫「お、おまえ、なんてこと……」

知慧、賢倫の肩を掴んだ手に力を込めて。

知慧「知ってるお兄ちゃん？ 世の中にはね、食べたいもの食べられない人や、会いたい人に会えない人がいるの。わたしたちが想像できない気持ち抱えて生きてる人がいっぱいいるの。そんな人のために、今のお兄ちゃんみたいな人がお経なんて読んじやいけない。そんな人たちからお布施もらっちゃいけないの」

怯えた目で知慧を見る賢倫。その目を逸らさない知慧。

知慧「今のままのお兄ちゃんがお坊さんになったりしたらいけないの、絶対に——おじさんからさつき電話があつてさ、今晚お兄ちゃんのことでうちに来るってさ」

賢倫「え、え——」

凌雲（声）「こんばんは——！ 峰陽寺だ！」

知慧「あ、来た」

掴んでいた賢倫の肩から手を離す知慧。

知慧「さーあ、今度の試合がんばらなくっちゃなあ」

部屋を出ていく知慧。

ドスドスと廊下を歩く足音が響く。

やがて部屋の入口に立つ凌雲。見開いた目で壁に寄りかかったままの賢倫を見つめる。

引きつった笑みを浮かべる賢倫。

○茜川高校 小運動場（日替わり）

裕美のノックを受けている真紀以外の内外野陣。

キャッチボールをしている寿音と悠希。その様子を少し離れたところから見ている美青。

寿音「悠希さあ」

悠希「なに」

寿音「マジで前の彼氏に未練とかないわけ」

悠希「ないよそんなの」

寿音「えー、ほんとに」

悠希「ほんとだよ」

寿音「じゃあ、次の試合、その元彼が観に来たら？」

悠希「え」

寿音「どうする？」

悠希「そんなの決まってるじゃん」

寿音「『もう一回つきあって』って言うわけか」

悠希「ばーか。んなわけないじゃん。思い切りボール顔面にぶつけてやる」

寿音「こっわ」

キヤッチボールを続ける二人を微笑んで見ている美青。

寿音「にしてもさあ」

悠希「ん？」

寿音「真紀だよ、真紀」

悠希「ああ。まあ許してやんなよ、ここんとこずっと練習漬けたっ

たんだからさ。彼氏と息抜きも必要だよ」

寿音「息抜きねえ——まあみんなに正直に言っただけでも進歩か」

悠希「ちっさな進歩だよね」

笑う二人。

寿音「あ、そうだ。美青」

美青「なに」

寿音「あれ、投げてよ。わたし一回座って受けてみたい」

頷く美青。

×

×

×

ピッチャーマウンドに立つ美青。

グローブを構え座る寿音。その横にバットを持って立つ悠希。

チームの誰もが練習をいったんやめて、その様子を見守っている。

セットポジションからナックルボールを投げる美青。

無回転のボールがホームベース手前で大きく揺れる。

寿音「うわっ！」

その変化に驚く寿音。グローブに触れることすらできない。

バッターボックスの悠希も驚く。

悠希「めちゃくちゃ揺れてる」

寿音「なんか前よりすごくなってる、美青のナックル。こりゃ打つのも捕るのも無理だわ」

マウンド上、恥ずかし気に笑っている美青。

美青「でも、真紀は捕ったことあるんだよ」

寿音「え、マジで？」

美青「うん。一回だけ」

知慧「まぐれよ！ ただのまぐれ！ イオンのゲームコーナーでモグラたたきやってる女にあの球捕れるわけないでしょうが！」

笑いが起きる。

○スーパー・ヘイオンン 外景

○前同・三階のゲームコーナー

ひたすら楽しそうに、和樹とモグラたたきに興じている真紀。

○茜川高校 小運動場（日替わり）

グラウンドに散っているオダマキーズ。

裕美が上空高くフライを打ち上げる。

真紀「オーライ！」

落ちてくるボールをキャッチする真紀。裕美を見てニッと笑う。

裕美「当たり前」

真紀「分かってますって——（グラウンドを見渡して）明日勝つよ、

朝霞に！」

知慧「なに偉そうに言ってるんだ、路チュー女！」

真紀「もう、それ言うなって！」

笑いが起きる。

× × ×

後片付けを終えて小運動場を去ろうとしている誰も。

美青がうつむいて立っている。

沙月「美青、どうしたの？」

美青「……」

季穂「美青」

答えない美青。

美青「……嫌だ」

真紀「え？」

美青「今日みんなと離れるの嫌だ」

知慧「明日、また会えるよ」

美青「——明日じゃ嫌なのっ！」

美青、泣き出す。誰もが美青を見つめる。

香苗「じゃあ、今日はお泊り会だ、みんなだ」

小夜「あ、それいいね」

飛鳥「どこで？」

里菜「うちじゃだめかな。今日お通夜も入ってないんだ。お布団い

っぱいあるし、お風呂もあるし」

寿音「全然いいじゃん」

知慧「じゃあ、いったん家帰って、着替えとかユニフォームとか持

って悠連会館集合ってことで」

飛鳥「その前にさ、うち来ない？ 一回みんなにごちそうしたいっ

て言っただよね、うちの父ちゃん」

真紀「うわあ、それいいそれいい！ 行こ行こ行こ！」

沙月「——ごめん、わたしだめだわ」

季穂「なんでよ」

沙月「譲ちゃんと祥子ちゃんが三月に一度の旅行の日なんだよね」

季穂「そんなのあるの？」

沙月「うん。やっぱ二人だけの日作ってあげたくてさあ。優花ひとりにしとくことできないし」

季穂「うちにあずけりゃいいじゃん、優花ちゃんのこと知ってるし。

お母さんに迎えに行くよ言っとくよ。真斗がたいへんかもな」

ニヤツと笑う季穂。

真紀「よし、決まった！ OK牧場！」

真紀の頭をはたく知慧。

知慧「あんたまだそれ言ってるのか！」

真紀「もう、いいじゃんかあ！」

笑いが起きる。

○河川敷の路上

夕暮れの道を楽し気に歩いて行く十一人。

○【麓喜軒】

テーブル席に座って、賑やかに食べている十一人。

栄治と恵がチャーハンをそれぞれの前に配膳していく。

食べ始める誰も。味の薄さに驚き顔を見合わせる。

飛鳥「父ちゃん、これって」

栄治「ああ。城内さんが食べてると同じものだ」

美青「え——おじさん、そんなのいいのに」

栄治「同じ鍋のチャーハン食った仲間ってやつだな」

笑顔を見せる栄治。

黙々とチャーハンを食べていく十一人。

○龍野家・ダイニングキッチン（夜）

食卓を囲んでいる研造、静海、真斗と優花。テーブルの上に

ホットプレートが置かれ、肉が焼かれている。

静海「遠慮しないでいっぱい食べてね優花ちゃん」

優花「はい、ありがとうございます」

研造「しっかりとしてるよなあ、季穂に見習わせたいよ」

静海「ほんとに——なんか約一名借りてきた猫みたいになってるのがいるなあ」

黙って焼き肉を食べている真斗。

静海「でも優花ちゃんえらい」

優花「え」

静海「お姉ちゃんお泊り会に行かせてあげたりして」

優花「だって、お姉ちゃんだけ行けないなんてかわいそうだから」

研造「えらいなあ、本当に」

静海「ねえ優花ちゃん、この子学校じゃどんな感じ？」

優花「真斗くん？」

静海「うん。友達とうまくやれてる？ 訊いてもちゃんと答えないからさ、いつも」

優花「うーん、どっちかって言うるとイジられキャラかな真斗君は」

静海「イジられキャラ？」

優花「うん。でもそれは真斗君が優しいからみんな安心してイジるの——あ、イジメられてるとかそんなのじゃ、ぜんぜんちがって。男子も女子も、みんな真斗君のこと大好きだと思う」

静海「そうか——でも、もうちょっと勉強も運動も頑張ってほしいんだけどなあ、母としては」

優花「でも昼休みへひまわり学級に毎日行ってるの男子じゃ真斗君だけだから」

研造「へひまわり学級？」

静海「発達障害や自閉症の子供さんがいる教室よ——真斗がそこに行ってるの？」

うなずく優花。

優花「ほんとに順番決めて行く決まりだったんだけど、だんだんみんな行かなくなっちゃって。女子はわたしも入れて五人。男子は学年で真斗君だけ」

静海「——あんたそんなこと全然家と言わないじゃない」

真斗「どうだっていいだろそんなこと——桐林さんも、いちいちそんなこと言わなくていいんだよ……」

優花「真斗君はそこでもイジられてる。でも真斗君絶対怒ったりしない。ひまわり学級の子も真斗君のことが大好きだと思う。わたし、真斗君すごいと思う。勉強や運動ができる子より、ずっとずっとすごいと思う」

研造「——だってよ、おまえ」

静海「んん、ふふふ」

真斗の頬を指でグリグリする静海。

真斗「ちよっ、やめるよ——」

赤面して食事を続ける真斗を微笑んで見ている優花。

○【悠連会館】菊の間

十畳の間に布団が敷き詰められている。それぞれの寝間着すがたの十一人が高揚した面持ちではしゃいでいる。

やがて寝転んで顔を寄せ合う十一人。

美青「ねえ、裕美さんってさ」

香苗「なに」

美青「どんなセックスしてたんだろ、宗春さんと」

季穂「え——」

美青「ほら、宗春さんとのこと話してくれたとき、裕美さんいっただじゃない。『どんなセックスしてたか知りたかったらおしえてやる』って、だからさ」

黙り込む誰も。

美青「あのね——わたしね、セックスできない体なんだ」

真紀「え」

美青「前に尿管結石ってのになつたことがあってさ、すごく痛くて、その痛みで心臓止まりかけたことがあるの——最初ってさ、すごく痛いんですよ。だからショックで死んじゃう可能性があるの、わたし」

小夜「美青」

美青「ごめんね、変な話ししちゃって。でも、思うんだ。心臓の病
気だった宗春さんも、きつとわたしと同じ気持ちだったんじゃない
かなって。だから、裕美さんと宗春さん、どんなセックスしたの
かなあってさ——でもさ、思っちゃうんだよね、すっごく優しく
してくれたら、痛いのも死ぬくらいでもなくなっちゃうんじゃない
のかな——とかさ。そんな男の人好きになんないかな——とかさ」

里菜「現れるよ、絶対。きつとそんな人が美青の恋人になる」

美青「そうかな」

飛鳥「うん、わたしもそう思う」

美青「ありがとう。そんなだからさ、じつはセックスのこととかさ
こい興味ある。へへへ。寝る前とか、いろいろ妄想する」

沙月「普通だよそれで」

考え込む誰も。やがて。

寿音「そりゃ、そりゃあさあ、あれ、あれだよ裕美さんと宗春さん
は、あれだよ」

悠希「あれって？」

寿音「だからあ、宗春さん初めてだったわけでしょ。で、裕美さん
は——年齢的にも経験あったはずだよ。だからさ」

横にいた悠希の肩を掴む寿音。寝転んだまま向かいあわせに
なる寿音と悠希。

寿音「宗春くん、おいで……」

悠希もその気になって。

悠希「裕美さん、ほ、ほく……」

寿音「震えてるの？ 怖がらなくてもいいのよ——はら、こっちに
きて……」

悠希「ひ、裕美さんっ！」

ひしつと抱き合う二人。

寿音「みたいな感じだったんじゃない」

香苗「きゃーっ」

季穂「このエロピッチャーどもが!」

嬌声をあげ喜ぶ誰も。

美青「でもさ、裕美さんやっぱすごいよね。人生賭けて宗春さん好きになったんだもん」

知慧「だよね——って、ちょっと真紀っ!？」

真紀「あ、あ、あ……」

布団の上にはたはた鼻血をこぼしている真紀。

知慧「あんたねえっ!」

真紀「だ、だ、だ……」

鼻を押さえて部屋を出ていく真紀。知慧以外が爆笑している。

小夜「ほんとにいるんだ、興奮して鼻血出す人って」

知慧「あの子くらいよっ!」

爆笑する誰も。

×

×

×

眠っている十一人。

○龍野家・研造と静海の寝室(夜)

優花を間に挟んで川の字になり布団で寝ている研造、静海。

静海「優花ちゃん、起きてる?」

優花「はい」

静海「こっちおいで」

優花「え」

静海「おいで」

優花「——」

静海の布団に移る優花。優しく優花を抱きしめる静海。

静海「真斗のこと、ちゃんと見ていてくれたんだね、おばさん、嬉し。」

優しく優花を抱きしめ、髪を撫でる静海。

静海「懐かしいなあ。女の子の匂い。優花ちゃんくらいの頃まで季穂もときどき『お母さんといっしょに寝る』ってきかないときが

あつてさあ」

優花「季穂ちゃんが」

静海「そうよ。意外と甘えんぼうなんだよあの子——きれいな黒髪。

沙月ちゃんとは全然違うんだね」

優花「お母さんが黒い髪だったの」

静海「じゃあ、ちよつとだけ自慢かな、お姉ちゃんに」

静海の胸に顔をうずめる優花。優花を強く抱きしめる静海。

静海「いつでもおいでね優花ちゃん。これから先、沙月ちゃんやお
じさんやおばさんとケンカして、お家にいたくないときがあった
りしたら、いつでも来たらいんだよ」

優花「——うん」

優花、泣いている。静海も涙を浮かべながら。

静海「ほんとに、ほんとにいつでもおいでね」

優花「うん」

静海「明日、お姉ちゃんや季穂の試合、いつしよに観に行こうね」

優花「うん」

優花を抱きしめ、その髪を優しく愛撫し続ける静海。

研造が横臥し、布団を噛んで声が漏れるのをこらえながら泣
いている。

○前同・真斗の部屋（夜）

布団の中、眠れない真斗。何度も寝返りをうつ。

○【悠蓮会館】菊の間（翌日）

美青が目覚める。眠っている十人。

部屋を出ていく美青。

○前同・桐の間+

長机がコの字に置かれその前に座っている美青以外の十人。

美青と真耶が、卵焼き、ウインナー、焼き鮭、ほうれん草の

おしたし、味噌汁の乗った盆を配膳していく。

真耶「ご飯はお櫃にもあるからおかわりしてね」

里菜「お姉ちゃん、これ」

真耶「美青ちゃんと二人で作ったの。お米も卵も鮭も美青ちゃんのお母さんが昨日の夜に持ってこられたのよ」

知慧「美青——」

美青「腹がへっては戦ができぬって云うじゃないの。モリモリ食べて、頭と体に血液行き渡らせて、今日の試合勝つ！」

沙月「美青のご飯は？」

美青「わたしは先におにぎり食べた。真耶さんに握ってもらってうなずく真耶。美青をじっと見つめる十人。

真紀「いっただつきまーす！」

真紀の大声。驚く誰も。

真紀「ほら、ご飯の前にはいただきますですよ、みんな。はい、せいの——」

十人「いただきますーす！」

にぎやかな朝食が始まる。十人を微笑んで見ている美青と真耶。

(第五話・了)